

小田原熱海間に、輕便鐵道敷設の工事が始まったのは、良平の八つの年だった。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行つた。工事を——といったところが、唯トロッコで土を運搬する——それが面白さに見に行つたのである。

トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後に佇んでいる。トロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走つて来る。煽るように車台が動いたり、土工の袈裟の裾がひらついたり、細い線路がしなつたり——良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思う事がある。せめては一度でも土工と一しよに、トロッコへ乗りたいと思う事もある。トロッコは村外れの平地へ来ると、自然と其処に止まつてしまう。と同時に土工たちは、身輕にトロッコを飛び降りるが早いのか、その線路の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し押し、もと来た山の方へ登り始める。良平はその時乗れないまでも、押す事さえ出来たらと思うのである。

或夕方、——それは二月の初旬だった。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行つた。トロッコは泥だらけになつたまま、薄明るい中に並んでいる。が、その外は何処を見ても、土工たちの姿は見えなかった。三人の子供は恐る恐る、一番端にあるトロッコを推した。トロッコは三人の力が揃うと、突然ごろりと車

輪をまわした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかった。ごろり、ごろり、——トロツコはそう云う音と共に、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登って行つた。

その内にかれこれ十間程来ると、線路の勾配が急になり出した。トロツコも三人の力では、いくら押しても動かなくなつた。どうかすれば車と一しよに、押し戻されそうにもなる事がある。良平はもう好いと思つたから、年下の二人に合図をした。

「さあ、乗ろう！」

彼等は一度に手をはなすと、トロツコの上へ飛び乗つた。トロツコは最初徐ろに、それから見る見る勢よく、一息に線路を下り出した。その途端につき当りの風景は、忽ち両側へ分かれるように、ずんずん目の前へ展開して来る。顔に当る薄暮の風、足の下に躍るトロツコの動揺、——良平は殆ど有頂天になつた。

しかしトロツコは二三分の後、もうもとの終点に止まっていた。

「さあ、もう一度押すじやあ」

良平は年下の二人と一しよに、又トロツコを押し上げにかかった。が、まだ車輪も動かない内に、突然彼等の後には、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思うと、急にこう云う怒鳴り声に變つた。

「この野郎！ 誰に断つてトロコに触った？」

其処には古い印裨天に、季節外れの麦藁帽をかぶった、背の高い土工が佇んでいる。——そう云う姿が目にはいった時、良平は年下の二人と一しよに、もう五六間逃げ出していた。——それぎり良平は使の歸りに、人氣のない工事場のトロッコを見ても、二度と乗って見ようと思つた事はない。唯その時の土工の姿は、今でも良平の頭の何処かに、はつきりした記憶を残している。薄明りの中に仄めいた、小さい黄色の麦藁帽、——しかしその記憶さえも、年毎に色彩は薄れるらしい。

その後十日余りたつてから、良平は又たつた一人、午過ぎの工事場に佇みながら、トロッコの来るのを眺めていた。すると土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登つて来た。このトロッコを押しているのは、二人とも若い男だつた。良平は彼等を見た時から、何だか親しみ易いような気がした。

「この人たちならば叱られない」——彼はそう思いながら、トロッコの側へ駈けて行つた。「おじさん。押してやろうか？」

その中の一人、——縞のシャツを着ている男は、俯向きにトロッコを押したまま、思つた通り快い返事をした。

「おお、押してくよう」

良平は二人の間にはいると、力一杯押し始めた。

「われは中^{なかなか}中^{なか}力^{ちから}があるな」

他の一人、——耳に巻^{まきた}煙^{たばこ}草^{はさ}を挟^{はさ}んだ男も、こう良平を褒^ほめてくれた。

その内に線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さなくとも好^よい」——良平は今にも云われるかと内心気がかりでならなかった。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したがり、黙黙と車を押し続けていた。良平はどうとうこらえ切れずに、怯^おず怯^おずこんな事を尋ねて見た。

「何時^{いつ}までも押し置いて好^いい？」

「好^いいとも」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思った。

五六町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。其処には両側の蜜柑畑^{みかんばたけ}に、黄色い実がいくつも日を受けている。

「登^{のぼ}り路^{みち}の方が好^いい、何時^{いつ}までも押させてくれるから」——良平はそんな事を考えながら、全身でトロツコを押すようにした。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下^{くだ}りになった。縞のシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ」と云った。良平は直^{すぐ}に飛び乗った。トロツコは三人が乗り移ると同時

に、蜜柑畑の匂を煽りながら、ひた迂りに線路を走り出した。「押すよりも乗る方がずつと好い」——良平は羽織に風を孕ませながら、当り前の事を考えた。「行きに押す所が多ければ、帰りに又乗る所が多い」——そうもまた考えたりした。

竹藪のある所へ来ると、トロツコは静かに走るのを止めた。三人は又前のように、重いトロツコを押し始めた。竹藪は何時か雑木林になった。爪先上りの所所には、赤錆の線路も見えない程、落葉のたまっている場所もあった。その路をやつと登り切ったら、今度は高い崖の向うに、広広と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来過ぎた事が、急にはつきりと感じられた。

三人は又トロツコへ乗った。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走って行つた。しかし良平はさっきのように、面白い気もちにはなれなかつた。「もう帰ってくれば好い」——彼はそうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロツコも彼等も帰れない事は、勿論彼にもわかり切っていた。

その次に車の止まつたのは、切崩した山を背負っている、藁屋根の茶店の前だつた。二人の土工はその店へはいると、乳呑児をおぶった上さんを相手に、悠悠と茶などを飲み始めた。良平は独りいらしながら、トロツコのまわりをまわって見た。トロツコには頑丈な車台の板に、跳ねかえつた泥が乾いていた。

少時しばらくの後茶店のちを出て来しなに、巻煙草を耳はさに挟んだ男は、（その時はもう挟んでいなかったが）トロツコの側にいる良平に新聞紙に包んだ駄菓子ありがとをくれた。良平は冷淡に「難有ありがとう」と云った。が、直すくに冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂がしみついていた。

三人はトロツコを押しながら緩い傾斜ゆるを登つて行つた。良平は車に手をかけていても、心は外ほかの事を考えていた。

その坂を向うへ下り切ると、又同じような茶店があつた。土工たちがその中へはいった後あと、良平はトロツコに腰をかけながら、帰る事ばかり氣にしていた。茶店の前には花のさいた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる」——彼はそう考えると、ぼんやり腰かけてもいられなかつた。トロツコの車輪を蹴けつて見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押して見たり、——そんな事に氣もちを紛まらせていた。

ところが土工たちは出て来ると、車の上の枕木まくらぎに手をかけながら、無造作むぞうさに彼にこう云つた。

「われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」

「あんまり帰りが遅くなるとわれの家うちでも心配するぞら」

良平は一瞬間呆氣にとられた。もうかれこれ暗くなる事、去年の暮母と岩村まで来たが、今日の途はその三四倍ある事、それを今からたつた一人、歩いて帰らなければならぬ事、——そう云う事が一時にわかつたのである。良平は殆ど泣きそうになつた。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いている場合ではないと思つた。彼は若い二人の土工に、取つて附けたような御時宜をすると、どんどん線路伝いに走り出した。

良平は少時無我夢中に線路の側を走り続けた。その内に懷の菓子包みが、邪魔になる事に気がついたから、それを路側へ抛り出す次手に、板草履も其処へ脱ぎ捨ててしまつた。すると薄い足袋の裏へじかに小石が食いこんだが、足だけは遙かに軽くなつた。彼は左に海を感じながら、急な坂路を駈け登つた。時時涙がこみ上げて来ると、自然に顔が歪んで来る。——それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴つた。

竹藪の側を駈け抜けると、夕焼けのした日金山の空も、もう火照りが消えかかつていた。良平は、愈氣が氣でなかつた。往きと返りと変るせいか、景色の違ふのも不安だつた。すると今度は着物までも、汗の濡れ通つたのが氣になつたから、やはり必死に駈け続けたなり、羽織を路側へ脱いで捨てた。

蜜柑畑へ来る頃には、あたりは暗くなる一方だつた。「命さえ助かれば——」良平はそう思いながら、迂つてもつまずいても走つて行つた。

やつと遠い夕闇の中に、村外れの工事が見えた時、良平は一思いに泣きたくなった。しかしその時もベそはかいたが、とうとう泣かずに駆け続けた。

彼の村へはいって見ると、もう両側の家には、電燈の光がさし合っていた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯気の立つのが、彼自身にもはつきりわかった。井戸端に水を汲んでいる女衆や、畑から帰って来る男衆は、良平が喘ぎ喘ぎ走るのを見ては、「おどうしたね？」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家の門口へ駆けこんだ時、良平はとうとう大声に、わつと泣き出さずにはいられなかった。その泣き声は彼の周囲へ、一時に父や母を集まらせた。殊に母は何とか云いながら、良平の体を抱えるようにした。が、良平は手足をもがきながら、噉り上げ噉り上げ泣き続けた。その声が余り激しかったせいか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集って来た。父母は勿論その人たちは、口口に彼の泣く訣を尋ねた。しかし彼は何と云われても泣き立てるより外に仕方がなかった。あの遠い路を駆け通して来た、今までの心細さをふり返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気もちに迫られながら、………

良平は二十六の年、妻子と一しよに東京へ出て来た。今では或雑誌社の二階に、校正の朱筆を握っている。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思い

出す事がある。全然何の理由もないのに？——塵^{じんろう}勞に疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すじ断続している。………

青空文庫情報

底本：「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年11月15日発行

1984（昭和59）年12月25日38刷改版

1989（平成元）年5月30日46刷

入力：蔣龍

校正：鈴木厚司

2004年10月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。